北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

「自然」へ開かれたスキー：「歩くスキー」の理論に学ぶ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 和司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004348

北海道教育大学紀要（第２部Ｃ）第45巻　第１号
Journal of Hakkaido University of Education (Section II C) Vol. 45, No. 1

平成６年10月
October, 1994

「自然」へ開かれたスキー

～「歩くスキー」の理論に学ぶ～

前　田　和　司
北海道教育大学旭川校スポーツ社会学研究室

Skiing that is open to nature

～ A study of the theory of "Aruku (walking) skiing" ～

Kazushi MAEDA
Sports Sociology Laboratory, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education
Asahikawa 070

Abstract

Today, nature education is in great demand, and skiing is receiving much attention as a medium for people to commune with nature. Since the 1960s, skiing in Hokkaido has changed from mountaineering skiing (for climbing to the top of mountain) and ski touring to gelände skiing (that means skiing in ski areas with ski lifts and piste. This term indigenous to Japan.) This change means that the field of skiing has changed from nature to facilities developed in nature. With this change, skiing in Hokkaido has closed to nature. As a result, destruction of nature by the developing ski areas has increased sharply.

In the 1970s, "Aruku (walking) skiing" was proposed by the Society for the Study of Physical Education in Northern Districts, Hokkaido University of Education (Chairman : Genkichi IMAMURA, honorary professor of Hokkaido University of Education), as skiing that is open to nature. This paper aims to make clear the theory of "Aruku skiing" and to search for a point of contact between nature education and the practice of sports.

はじめに

北海道に限らず，スキーと言えば，アルペン・ノルディックといった競技スキーを除いては，スキー場[1]をフィールドとして行われる「ゲレンデ・スキー」を思い浮べる人がほとんどであろう．そしてスキーは，都市の生活者にとって冬の山々に広がる自然と出会う貴重な機会をもたらしてくれるものとして歓迎されている[2]．このようにスキーは自然の中で行われる親自然スポーツと考えられているが，実際にはスキー場自体が大規模な自然改変の上に成り立っているという矛盾を抱えたままである．

地球環境問題を契機に，我々が推し進めてきた産業主義の行き過ぎが誰の目にも明らかになるにつれ，人々の「自然」への志向が高まってきた．今こそ，「自然」に気づき[3]，その「自然」のうちに生かされている存在として人間を理解する「自然」教育が求められていると言えよう．そして，「自然」教育は産業主義の暴走に歯止めをかけるという意味において，日常の生活を変えていくベクトルを持つ．従って「自然」教育の「場」は日常生活の営まれる「場」であり，「生活の場」からかけはなれた「自然」ではない．

とはいうものの，気づくべき「自然」とは何かは問われないまま，記号としての〈自然〉だけが消費されている場合

が多い．スポーツ（親自然スポーツ）もその〈自然〉と交流する媒体として，一身に期待を担うようになっているが，スキー場の例に見られるように，現実のスポーツ実践と「自然」との間の隔たりは大きく開いたままである．

しかし，「スキー」という名称のもとに展開されている実践は，「ゲレンデ・スキー」だけではない．北海道では「歩くスキー」が「自然」に開かれたスキーとして，すでに20数年前に提唱され，今日までに多数のクラブが発足し，各種のイベントも多く開催されるようになっている．本稿では，「自然」教育とスポーツ実践との間の架橋を探るためにも，この「歩くスキー」提唱の中心的存在であった北海道教育大学寒冷地体育研究会（以下「研究会」）と，主宰者である今村源吉北海道教育大学名誉教授の理論展開を辿りつつ，「歩くスキー」における親自然性とはいかなるものかを明らかにすることを目的とする．

1．「自然」へ閉じるスキー
～「山スキー」「スキー・ツアー」から「ゲレンデ・スキー」へ～

北海道のスキー場にリフトが設置されるようになったのは昭和30年代半ばからである．それ以前のスキー場では，スキーを担ぐかシールを装着して自力で登っては滑り降りるというスキー実践が行われていた．当初はこのようなスキー場に新たにリフトがかけられる場合が多かった．北海道では，スキー場で行われるスキーの他にはツアースキーと山岳スキーが大きな流れとしてあった．「寒さ，雪，山，森，これ等はすべて色々な変化をもってスキーをするための対象となって人間の前に現われる．したがってスキーをすることは必然的に自然と共にあることになる[4]．」といわれるように，それらは，人間が自らの技術と知恵を駆使して「自然」というフィールドに踏み出していくスキーであった．

しかし，札幌オリンピックが開催された昭和47年頃を契機として，複数リフトを持つ大型スキー場が道内に次々と開発されるようになった．これによって，スキー人口は急激に増加したが，そこで行われるスキー実践はそれ以前とは全く異なる性格を持つものとなった．

まず，スキーが行われるフィールドは，山岳や森林といった「自然」そのものではなく，「スキー場」という人工的に作られた場であると考えられるようになった．こうした「スキー場」は，リフトによる運搬，圧雪されたコースというように，もはや「施設」と呼ぶべきものである[5]．

リフトの出現は，斜面を歩いて登る手間を省き，よりスキーを大衆的なものにしたといえるが，それと同時に冬の山の景色を眺める時間，動物の足跡や小鳥のさえずりに足を止める時間を，スキーの実践過程の中から取り除くことになった．また，当然のこととして「施設」としての「スキー場」では，山の気象に関する知識や雪崩を回避する知識など，冬山の「自然」の厳しさについて，できるだけスキーヤーをわずらわせない方向へ配慮する傾向がある．スキーヤーは手軽さと安全性と引き換えに，「自然」に関する体験的知識の修得の機会を狭められている．

スキー実践のフィールドは自然の山野から「スキー場」へとその主流を移していく．人々はもはやスキーを媒介として「自然」の中に踏み出していくのではなく，「自然」の中に「スキー場」という人工的施設を設けて，その中でのみ行われる「ゲレンデ・スキー」に終始するようになったのである．

このようなスキー実践のフィールドの変遷に従い，スキー技術に対するスキーヤーの捉らえ方にも変化が生じ始めた．「スキー・ツアー」や「山岳スキー」においてスキーの技術は「自然」のフィールドを走破あるいは滑降するための「手段」であるが，「ゲレンデ・スキー」における技術はそれ自体が「目的」となる．前者における技術は「自然」と交歓するための媒体であり，後者においてはコース（「自然」のフィールド）の方がターン技術のための媒体となる．

「自然」教育の目指すところである「自然への気づき」という観点からすれば，この技術の捉らえ方の逆転の持つ意味は非常に大きい．「ゲレンデ・スキー」という実践形態においては，スキーヤーの関心のほとんどはターン技術の修得と上達に向けられる．そこではコースという斜面と雪質に対してはコミュニケーションの回路が開かれているものの，その基盤となる山や森林，さらには生態系というものに対しては回路が閉ざされている．

また今村は，「競技スキー（アルペン）」に関して次のように言及している．「技術を高度に求めてゆく過程で競技スキーの形態が生まれる．……（中略）……しかし，競技スキーの領域は，やがて自然とは無縁なものへと指向する．競技スキーは出来るだけ自然を否定する．それは競技者に公平なプレイをさせるために，公平な条件が必要であり，競技場は

人工的に改造される[6].」「競技スキー」と「ゲレンデ・スキー」とでは目指すところは異なるが，スキーヤーの意識がターンの技術体系の中で完結している点では共通している[7].

さらにスキーヤーの意識の技術体系への内向に拍車をかけたのがスキー連盟の検定制度であるという.「当初，指導員とは一般スキーヤーにボランティアでスキーを教えるためのものであった.その後,指導員とはスキー技術の目安になってしまった[8].」というように，資格の権威に対する信奉が，スキー技術にランクづけをすることになり，実際に指導する立場にないスキーヤーもより高い資格の修得に血道を上げるようになったのである.

この技術のあくなき追及は，用具の高度化をもたらし，スキー場自体も「どんどんエキサイトしていき，素晴らしい斜面，斜度，高度を持ったいわゆるピステが出来上がってくる．現在のスキー場はすでに競技場化している[9]」という状況を生みだした．競技に相応しいスキー場が要求されるようになると，その開設される場所は山地の奥へと求められるようになり，大規模な自然破壊が必然的なものとなったのである.

2.「自然」へ開かれたスキー　～「歩くスキー」の提唱～

「歩くスキー」という名称の発祥については明らかになってはいないが,[10]「歩くスキー」に関する最初の出版物は「研究会」による『歩くスキーの理論と実践　寒冷地体育研究集会報告（1974)』である．この「報告書」に引き続いて出版されたテキスト『歩くスキー（北海タイムス社，1976)』では，「厳しくも豊かな冬の自然の中で行う奥行の深い運動（p. 17)」という記述にみられるように，「歩くスキー」とは「自然」のフィールドを前提としたスキーの実践形態，すなわち「対自然スポーツ」であることが強調されている.

今村は「歩くスキー」を提唱する以前から，常に「スキーとは，一般大衆の自然運動である[11].」と主張し続けてきた．その主張の根底にあるのは,「機械文明が進み，観光開発と称して，薄っぺらなブルドーザー文化がどんどん自然を破壊し，人間までも破壊してしまいつつあるきょうこのごろである．大自然の豊かな北海道は，長い冬の生活を，自然と闘うのではなくして，自然とともに生活する態度を持たねばならない．スキーを通して，自然から学ぶ人間性こそ，今の日本に一番必要なことでもあるまいか[12].」という認識であった．時は，日本の自然保護運動のピーク[13]といわれる時期であったが,「我々体育研究者／指導者の気づかない『身体性』」が「『環境』のもつ政治性とエリート性[14]」に対してなじめずにいる中にあって,「自然」への親和性を持ち得た今村の感性は，青年時代から親しんできた「スキー・ツアー」の経験[15]を通じて養われたものであることは想像に難くない．しかし,「対自然スポーツ」としてのスキーのあるべき姿の構想，さらにそれが「歩くスキー」の理念へと引き継がれることになったのは，北欧，特にフィンランドにおけるスキー実践との出会いによるところが大きい.

昭和42年,「ゲレンデ・スキー」が北海道における一般スキーの主流となりつつあることに疑問を抱いた今村は，スキーの原点を見極めるため，スキー発祥の地である北欧に単身留学を試みた.

フィンランドの地でまず実感したたものは，冬期間の気候の厳しさであった.「雲は寒い冬の期間のほとんど，フィンランドから太陽のめぐみをうばってしまう．長い冬の夜と，日中もうす暗い生活が続くのである．太陽がないので日中温度があがることもなく，マイナス30度から40度が何日も続き，気温はグングン下がり，静かに，静かに凍る．風のないこの国の冬は全く静かで，北海道での吹雪の中で経験するものすごい感じの寒さとは又違った静かな恐ろしさと云った寒さであった[16].」

そして何よりも今村をひきつけたのは，厳しい自然環境の中に根をおろして生活を営むフィンランドの人々の姿とその生活様式である．特にスキーが冬の生活様式の中で重要な位置を占めていることに注目している.

「自然の恵みから見放なされた人々は，なんとかして生きていくために，あらゆる知恵をしぼって”生活”を考えだしていく．――それがフィンランドの冬の生活であり，そのひとつの現象として，スキーがおこなわれているとみられるのである．冬の夜，夕食をすませると，人々は暖かい部屋をすてて凍るような戸外に出る．そしてスキーをはき，森の中に作られたコースを走るのである[17].」「夜の7時ごろ,私は森の中のコースに出かけた.照明が完備したスキー・コースは，夜でも快適に森の中を走ることができる.」「同じコースを走っている人に，このシーズンにはいって何キロくらい走りましたかと聞いたら，自分は会社員なので，土曜，日曜くらいしか走れなくて……と笑って答えなかった.」「へ

ルシンキの市内には，このような森や湖の中に，公園の中に，大小さまざまなコースが全長200キロもとってあるとのことである[18]．」

「スキー場」に出かけて行う「ゲレンデ・スキー」とは異なり，家を一歩出たところからスキー実践がはじまる．まさに「生活の場」がスキー実践のフィールドとなっている．そして何よりも，フィンランドの人々の生活様式とそれを生みだす精神性が「自然」との調和を大前提としており，それらの上にスキー実践が成立っていることを忘れることはできない．

さらに，フィンランド人の精神性とスキーとの関連性について今村は次の用に述べている．

「何百年もの原始林のにおい，身に迫る寒さ，荒りょうとした凍った湖，この中をスキーで一人で走っていると，色々なことを考える孤独時間をもつことが出来る．この中で自然の猛威と，恐ろしさを通じて人間のあわれさ，弱さをつくづく感じさせてくれる．その反面又人間の生命を本当に知ることが出来る．人間を愛し，大切にし，尊敬する心がこの自然の中から教えられるような気がする．」「フィンランドのスキーは，自然と云う場を通して，生活に必要な体をつくると同時に，フィンランド人の高い精神文化の想像に役立っていることが判る[19]．」「一年に何キロ走ったか，何日スキーをやったかがこの国のスキーでは大切なこととして問題にされる．用具などはそれ程重視されない．美しい，大切に保存されている自然の森に走り，動物と語り，自分の体を鍛えることに本当の楽しみとよろこびを感じているのである[20]．」「森と湖と自然の動物たちとを心から愛する民族である．クロス・カントリーは人間をその大自然に案内する．世界中，いまやどこでも機械文明のため，人間喪失し，公害が広がっている中で，北欧の人たちは，寒い冬を，この自分たちで守った大自然の中で，今度は人間性を守ってもらっている．その手段となり，舞台となっているのが，北欧のスキーによるクロス・カントリーであるといっても過言ではないだろう[21]．（傍点筆者）」

フィンランドでは，スキー実践のフィールドが「自然」そのものであり，コースも，森の中，湖の上，夏場の小道に人間の足やスノーモービルとコースカッターによって作られ，自然改変はほとんどないか最小限に止められている．技術へのこだわりもないわけではないが，あくまでも「自然」のフィールドに踏み出していくための手段の域を出ることはない．「自然と共にある」というフィンランド人の精神性[22]の上に展開されるスキー実践が，その精神性を強化し再び生みだしていくという循環がここにみられる．フィンランドにおけるスキー実践は，「自然」に対して開かれているということが存立条件とまでなっているのである．

今村は，最初の北欧留学から帰国して後，「寒冷地体育研究会」での議論を重ねるとともに，数度に渡ってフィンランドを訪れ，「歩くスキー」の構想を固めていった．その大きな柱となったのが，「対自然スポーツ」としての「歩くスキー」である．「対自然スポーツ」という表現は，自然を克服するという印象を受けるが実際にはそうではない．

「われわれ寒冷地域に生活するものにとって『冬の生活』それは直接的に『冬の自然』との対面であり，そこに『自然との対話，理解，調和』が要求される．この『自然』と相対したときに，人間は長い歴史の中で『自然』と戦い必ず打ち負かされ，そして『自然』と一致し『自然』からの教訓と恩恵を得て，はじめて『自然』と調和の生活を知ってくるのである．それは北方圏に生活する民族の『自然』と『人間』の中に見られる姿であろう．日本における『自然と人間』とは，『自然』の非常に温和な環境にあっての『自然』観であり，『自然』の美しさ，『自然』の豊かさをさらに深く内的に見つめる『自然』の追及である．この『自然と人間』とのかかわり合いの思想は歴史的に古く見られるものである．寒冷地における日本の対自然観の歴史は浅い，人間の及ばざる『自然』に対する謙譲と忍耐，敬けんなどの自己反省の習慣は遠く北方民族には及ばないのである．『スキー』はこの『冬の自然』に対面するスポーツであり，きびしい『自然』の中から『人間』を再発見する環境がその中に存在することである．われわれは，これを『自己発見の文化』としてとらえたのである[23]．」

この「自己発見の文化」という考え方と，その実践としての「歩くスキー」は，「自然への気づき」を重視する「ネイチャー・ゲーム[24]」とも重なってくる．

3．「生活の場」への視点

「歩くスキー」の理論的展開の中で，もうひとつ見落すことのできないのが「生活スポーツ」という捉え方である．

「生活体育」「スポーツの生活化」という一連の流れにも親和性を持ち，スキーの日常化という側面も抑えてはいるが，より重要なのは「生活の場」への視点であろう．

北海道のスキーは，1912年にオーストリア派遣武官のテオドール・フォン・レルヒによってもたらされた[25]中部ヨーロッパのアルプス地方で発達した山岳滑降技術としてのアルペン・スキーと，1916年に北海道農科大学教授，遠藤吉三郎によってもたらされた[26]北欧スキーという2つの流れを持っている．

今村らはその後の北海道におけるスキーの受容と展開の過程を，「レルヒが我が国にもたらしたスキー術において，『歩く』という技術形態を見ることが出来るが，以後交通機関の発達，滑降・回転技術の普及・発展，用具の改良等によりスキー技術構造の主流から『歩く』という形態が次第に消失していった．（傍点筆者）」「遠藤によってもたらされた北欧スキーの本質は，彼が指摘しているように『山野を跋歩する』ことにあった．がしかし，彼のスキーは，一方は小樽・札幌地方の山岳地帯という地理的条件のもとに『山スキー』として発展し，他方は今日の距離競技としての平地滑走競技として発展していったので，非山岳地帯の自然を対象として，『歩く』・『滑走する』といったスキー形態としては発展しなかった[27]．（傍点筆者）」と捉えている．すなわち，レルヒに起源を持つオーストリー・スキーは，山岳地帯をフィールドとして，競技スキーのアルペン種目と一般スキーとしての「ゲレンデ・スキー」へと分化していき，遠藤に起源を持つ北欧スキーは，非山岳地帯をフィールドとした競技スキーのノルディック種目と山岳地帯をフィールドとした一般スキーとしての「山スキー」へと分化した．北海道と一口にいっても，石狩支庁，後志支庁といった山岳の占める割り合いが多い地域から，十勝支庁南部，網走支庁，釧路支庁のように平野部が多くを占める地方まで，その地理的環境は様々である．そして，非山岳地帯における一般スキーの領域が空白のまま残された．

前述したとおり，北海道のスキー実践は強力に「ゲレンデ・スキー」へと集約されていった．その波は，非山岳地域において様々な混乱を生じさせることになる．上川支庁管内は比較的山地の占める割り合いが大きいが，平野部にある市町村ではスキー場を持たないところが多かった[28]．そのために学校教育の中に「ゲレンデ・スキー」が導入されていく過程で，「指導上の悩みとして多くあげているのは，スキー指導の場所及びスキー用具の問題である．」「従来の指導内容は，滑降，回転が中心で，そのよりどころを『全日本スキー教程』に求めた．従って『ゲレンデがないから，あるいは，スキー場に遠いからスキー指導ができない』」「一方『歩くスキー，走るスキー』を取り入れようとすれば，現代のスキー（アルペン・スキーの用具）では不適である[29]．（括弧内筆者）」といった問題が生じてきたのである．

「歩くスキー」の提唱は，北海道に生活する上で「『人間性豊かな生活』『人間中心の生活』を指向するとき，その冬の自然的環境の中で自主的，主体性をもった活動がなくては，どうしてこれが達成できようか[30]．」という記述に見られるように，単に「歩くスキー」というスキー形態の普及という範囲を越えた理念を持っている．すなわち，積雪寒冷地という自然条件の中で生活が営まれる際，そこには冬の「自然」と向き合う独自の生活文化が創造されてしかるべきであり，異なった環境のもとで生みだされた生活文化をそのまま移入するのではなく，自らが生活する地域環境を正面から受け止めそこから生活を築き上げていくという，いわば「生活の場からの発想」に貫かれた「運動」の色彩を帯びている．その観点に立つならば，「人工的スキー場によるところの『やらされるスキー』により，一般大衆のスキーは好むと好まざるとにかかわらず，画一的な流行のスキーのみが我々の周辺に存在しているのである．すなわちそれは，自らの環境生活に関係なく存在しているのである[31]．」というように，画一的な「ゲレンデ・スキー」の普及そのものに対して疑問を呈することになる．

また，「歩くスキー」を諸外国におけるノルディック・スタイルのスキー実践を形式的に平行輸入したものと理解する向きもある．だが，それは「生活の場」への視点を見落した理解に過ぎず，「歩くスキー」の本質を理解したものにはならない．実際，カナダ・アルバータ州のクロスカントリー・スキー・コースのほとんどが，国立公園やリゾート地周辺といった「生活の場」からは離れた場所に設けられている[32]．それに対して「歩くスキー」実践の場は，あくまでも「生活の場」を離れることなく，「対自然スポーツ」「自己発見の文化」として，フィンランドの人々が持ち得ているような自然への感性，高い精神性を養い，そこから北海道固有の生活文化を創り上げていくことが重要とされているのである．

まとめ

昭和40年代以降，スキー場の機械化，スキー連盟の指導方針，さらにスキー産業の強力な後押しによって，北海道では「ゲレンデ・スキー」への需要が急速に高まってきた．この過程において，人々の認識は「スキー＝ゲレンデ・スキー」という図式へと一元化されていく．スピードと技術の追及という指向性を持つ「ゲレンデ・スキー」の実践においては，スキーヤーの意識は技術体系の内側へと内向し，「自然」へのコミュニケーション回路を閉ざすようになってくる．そして，スキーヤーはスキー場開発に伴う自然破壊の事実を問題として意識化することが極端に少なくなってきた．結果的に競技場化するスキー場が開発の場を「自然」の奥へと広げられていくことを許してきた．

このような状況における「歩くスキー」の提唱は，「対自然スポーツ」「自己発見の文化」といった「生活の場からの発想」に貫かれ，「ゲレンデ・スキー」へと一元化・均質化する北海道のスキー実践を異化する意図を込めて展開されてきたものと言える．さらに「僕等が歩くスキーをつくりだしたのは，自然発生的ではない．何とかして，北欧のオリエンテーリングやスキーといった自然スポーツを生みだす社会的・文化的背景，北欧の人々の自然に生かされているという切実な思いというものに気づかせたいと考えた．そして形式教育的に歩くスキーを経験させることによって，それを理解させようと思った[33]．」と今村が述べるように，「歩くスキー」の提唱は，積雪寒冷地，比較的「自然」が残された地域としての北海道における生活のあり様，そして我々自身の精神性そのものを見据えたものであることに注意を喚起したい．したがって，「歩くスキー」をスキー実践の一形態として捉えるだけでは，「歩くスキー」理論の本質に接近することはできない．

しかし近年，市民レースとして行われる「歩くスキー」のイベントが盛んになる過程で，かつて「ゲレンデ・スキー」が辿ったのと同様な，競技志向や技術体系へと内向する傾向が強まってきた．その傾向は新たな愛好者をも絡め取り，「歩くスキー」提唱の真意を理解することを妨げている．一方，各地で展開する「歩くスキー」実践の中には，あくまでも「自然」をフィールドとした活動を展開し[34]，地域のクラブでの人的交流を契機として自らの「生活の場」へと目を向けていくものもみられる．

「歩くスキー」が提唱されてから四半世紀が経過した．「歩くスキー」は高度成長期に突出した様々な社会の歪みを見据えつつ，練り上げられ実践されてきたものであった．そして現代は，産業主義の行き過ぎによる「外なる自然」と「内なる自然」との崩壊が顕在化し，「自然」と人間との関係性の模索を猶予できないものとして我々に突きつけてきている．このような状況にあって，今一度「歩くスキー」提唱の本来的な意味を問うことは，「自然」とスポーツ実践との間に架橋をかける作業に，大きな示唆を与えてくれるであろう．それと同時に，北海道における「歩くスキー」実践の展開を丁寧に追っていく作業も行っていかなければならないと考えている．今後に期したい．

―注―

1）正確にはアルペン・スキー場というべきであろうか．日本以外ではクロスカントリー・スキー場も一般的である．北米では1970年代には20ヵ所に満たなかったが，1980年代には500ヵ所を越えるまでになっている．Sheahan, C., Sports illustrated Cross-country Skiing, Harper & Row, New York, 1984, p. 13

2）ここ5年間におけるスキー・ブームは，スキー場を自然との出会いの場というよりも社交場とすることによってもたらされたという分析もある．板倉海彦，スキー市場の最新動向と今後のスキー場経営の課題，新潟地方索道協会，全国スキー場総覧［ski:］'92，学習研究社，東京，1991，p. 3

3）ジョセフ・B・コーネルは，「自然の声を聞く」ために「ネイチャー・ゲーム」を開発した．ジョセフ・B・コーネル，ネイチャーゲーム，柏書房，東京，1992

4）今村源吉，大学体育におけるスキー指導について，全国大学保健体育協議会，大学体育指導者研修会報告書，1977，今村源吉教授退官記念誌編集委員会，今村源吉退官記念誌（以下，記念誌），1986，p. 27より．

5）「現代スキーの問題点として，近代化がスキー場におよび，スキー場から自然を追いだし，さらに自然を破壊してゆくことであろう．」今村，北欧スキーを分析する，SKI journal，1968，記念誌，p. 67

6）今村，大学体育におけるスキー指導について，全国大学保健体育協議会，大学体育指導者研究会報告書，1971，記念誌，p. 28～29

7）この思考が極端化したものが，現在の都市の中の巨大な室内スキー場やバーチャル・リアリティによるスキーの疑似体験である．問題

は，それらにかなりの数の人々が殺到するという事実であり，彼らの「自然」から閉じたスキーの捉え方が，新たなスキー場開発や拡張による自然破壊に対してけっして敏感とは言えないということである．

8）今村，フィールドノート，1993・9・166
9）寒冷地体育研究会，歩くスキーの理論と実践，1974，p. 71
10）三浦裕・長屋昭義・小河幸次，「歩くスキー」に関する研究の動向と今後の課題，北海道体育学研究第26巻，1991，p. 60
11）今村，日本のスキー，大学スキー研究会，D.S.K，1967，記念誌，p. 110
12）今村，冬の生活とスキー，SKI journal，1969，記念誌，p. 76～77
13）「1960年代に所得倍増計画をバネに急激な伸びを見せた日本の経済成長はとどまるところを知らず，……（中略）……レジャーブームにのった観光開発と経済政策のひずみが日本の国土の環境破壊という形であらわれるに至って，それに対する国民の抗議は一連の公害闘争や住民運動の形で展開された．」親泊素子，日本の自然保護運動に二元性，黒坂三和子編，日本の人と環境とのつながり，思索社，1989，p. 42
14）松村和則，スポーツと環境の摩擦の反省の上に―〈スポーツと環境（問題）〉の社会学をめざして―，日本体育学会，体育心理学シンポジウム，1992
15）今村，フィールドノート，1993・9・16
16）今村，フィンランドのスキーをみて，北海道基礎スキー指導員会，シュプール，1967，記念誌，p. 22～23
17）今村，フィンランドの冬とスキー，現代スキー全集第1巻，実業之日本社，1970，記念誌，p. 125
18）今村，フィンランドの冬とスキー，現代スキー全集第1巻，実業之日本社，1970，記念誌，p. 126
19）今村，フィンランド留学について，大学スキー研究会，D.S.K，1967，記念誌，p. 114
20）今村，フィンランドのスキーを見て，北海道基礎スキー指導員会，シュプール，1967，記念誌，p. 23～24
21）今村，フィンランドのスキーツアー　日本のスキーがおき忘れた真の楽しみ，現代スキー全集第3巻，実業之日本社，1970，記念誌，p. 138
22）今村，フィールド・ノート，1993・9・16
23）寒冷地体育研究会，歩くスキーの位置，寒冷地体育研究会，前掲書，1970，p. 11
24）ジョセフ・B・コーネル，前掲書，1992
25）栗林薫，北海道一般スキー八十年の歩み，広告の岩泉，1991，p. 3
26）栗林，前掲書，p. 6
27）寒冷地体育研究会，歩くスキーの位置，寒冷地体育研究会，前掲書，1974，p. 9
28）現在，上川支庁管内には20ヵ所のスキー場があるが，昭和50年以前に開設されていたのは7つだけである．運輸省北海道運輸局，北海道運輸要覧（陸運編），1993
29）赤塚幸雄，上川管内におけるスキー指導の実態，寒冷地体育研究会，前掲書，1974，p. 56
30）今村，総説，寒冷地体育研究会，前掲書，1974，p. 4
31）今村，総説，寒冷地体育研究会，前掲書，1974，p. 4
32）Daffern, G., Kananasukis country ski trail, Rocky Mountain Books, Calgary, 1992
33）今村，フィールド・ノート，1993・9・16
34）鹿追町・上士幌町が主催する「糠平湖～然別湖横断スキー」は今年で18回目を迎えるが，他市町村のイベントが市民レースの形態を取るのに対し，開催当初から「ツアー」の形態で行われてきている．